

平成30年6月25日発行  
毎月1回(25日発行) 第11号  
第6号(2017年12月)以来21年  
3月23日発行(読者定額)認可

月刊 アートコレクターズ

The Nude 2018

*The Pleasure To See.  
The Pleasure To Buy.*

# Art Collectors'

2018 NO. 6

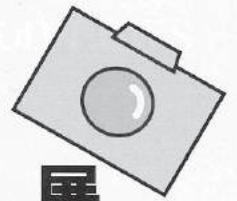
# The Nude

魔性のハダカ

2018







# 編集部「これが欲しかった！」 展覧会レポート



最新情報は「アートコレクターズ」  
のtwitterで！  
アカウント：月刊アートコレクターズ  
@atcolle

## ぎふの画廊めぐり

岐阜市内を中心に、同地の画廊・美術館が会期を合わせて展覧会を行う毎年恒例の春の企画。地域の画廊主体のイベントの先駆けとして22年目となった今年も、地元美術ファンと県外のお客も交え、着実な盛り上がりを見せていた。得意分野もそれぞれな参加8軒の画廊の様子をお伝えする。

岐阜駅に直結、岐阜放送のエントランス部分を改装したぎふチャンアートギャラリーでは、4月号でインタビュアーを掲載した前市長の細江茂光氏の個展。岐阜の風物を描い



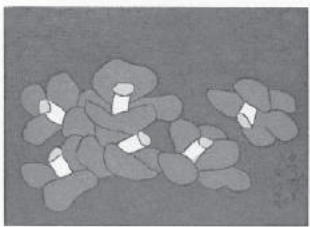
川合玉堂「松沢水車」(後藤紙店)



吉田友幸「なしの花」(田口美術)



國司華子「バナナ群」(長江洞画廊)



熊谷守一「つばきの花」(柳ヶ瀬画廊)

た水彩、旅先などで描いたという水彩。アマチュアながら、音楽もたしなむ氏ならではのセンスの光る内容だった。

岐阜駅の南側からまわり始める。後藤紙店では川合玉堂展。人気の高い鶴飼や雪景をはじめ、情緒豊かな日本の営みを描いた図柄が、幅広い年代・作風から軸物を中心に揃う。岐阜県美術館にほど近い田口美術は、滋賀を拠点に制作する若手・吉田友幸の個展。琵琶湖の水の気配も濃厚で静謐な風景画は、独特の構図のとり方もあいまって、一見クラシカルでありながら先鋭的。詩情にみちた心象風景の趣き

をなしていた。それから、岐阜駅の北側へ。画廊光芳堂は、物故作家から現役の大家まで、岐阜に縁のある土屋禮一のような作家を含む名品展。洋画から日本画、彫刻も合わせ、広々とした空間を贅沢に生かした展覧となった。長江洞画廊は4年ぶり4回目となる國司華子展。12ヶ月の暦に合わせた花の画は、この作家らしい遊び心と洒落なセンスに溢れた小品群。院展の大作のみならずこうした小品もまた人気の高い作家だが、一作ごとに様々な技法

額取り入れられており、布や額の仕立て、画題も凝っている。春らしい、瑞々しいイメージが横溢していた。若手作家を幅広く扱うアート・ギャラリー水無月では、愛知県出身、94年生まれながら既に展示歴もいくつかある日本画家・玉井伸弥の個展を開催。日本の伝承に想を得たポップな絵柄は、しかし確かな技術に裏打ちされている。可愛らしいなかに哀感と情緒も感じられ、特有の魅力をたたえる。そのあとは、画廊文錦堂。美濃焼の新星として注目を集める鈴木都の個展。歳若い頃から陶芸を志し、独学で研究を続ける作家。新たなチャレンジだという「猩猩志野」と銘された赤の志野焼が特に印象深かった。

最後に、「画廊巡り」の代表でもある柳ヶ瀬画廊へ。恒例の熊谷守一展である。映画の公開や、大規模回顧展の開催と話題の続く守一だが、作品の扱いにおいて全国随一の同画廊ならではの内容。様々な年代の油彩から紙作品、書画が揃ったが、至近距離で味わえる機会は、東京ではそうないだろう。美術館での、ある種アカデミックとも言える展覧とまた異なる、伸びやかな感性で虫や小動物植物の生を描

## 杉原真樹個展「呼吸」

いたその澄みやかな色彩に気が晴れる思いがした。湖面の鴨など、リラックスした雰囲気、墨彩も面白く、水と山が身近でしっとりとした岐阜の空気感との親和性もまたあるのかな、と感じた。(景)

た杉原は、展覧会を鑑賞する人々を今作によって作品の一部にしている。今後両者を結びつけながら、どうかたちがある作品を残していくのか活動を追いかけて。(中)



杉原真樹

## ミナミ・ノリタカ個展

「California City, California」

青山霊園の裏手を彷徨いながらKana Kawasumi Galleryの新しい移転先にたどり着くが、それは外苑西通り沿いのあるビル5階に位置する。そのこけら落とし展として、ミナミ・ノリタカによる、「カリフォルニア・シティー」の今の姿を空撮した作品が展示されている。カリフォルニア・シティーは1958年に試みられた理想巨大都市だったが、予想通りに人口が集まらず、失敗した都市の典型例とされている。

「事物と体験者結び付ける方法さえあれば、実態としての作品自体は必要ない」という理念の<sup>①</sup>での活動を経

明るいモノクロ写真で撮影された、空漠とした都市の光景が目前に広がる。都市の命名はオスカー・ニーマイヤーの「Brazilia City, Brazil」を思い出させるが、それはさ



らに様々な失敗あるいは成功した居住区/都市を思い出させる。米ミズリー州東セントルイスにあるブルーイット・アイゴー、インドのフアタープル・シークリ、ミャンマーの首都ネピドーや中国でこれに類似する沢山の空っぽの都市。ル・コルビュジエが設計したインドのシャンデীগアル、アラブ首長国連邦のアブダビ市やシリコン・バレー等々。20世紀のユートピアというテーマに共感し、興味と関心をそそられた。

スマートフォンをはじめ、インターネットがますます発達すること世間なので、同じテーマに取り組む他の写真家の作品にも簡単にアクセスでき、自分なりにこのテーマについて調べてみた。すると前述のような都市が関連として挙げられることがわかった。カリフォルニア・シティーは人工で造られ、失敗した一例といえるが、その事実だけではないようだ。それらを把握して作品に戻ると、様々な質問が自然に湧き起こるものである。たとえば「これは綺麗な作品だが、空撮はどんな意味をもつのか？ モノクロを用いるのは、単に美学的な目的のためなのか、それともしっかり作品構成の中に盛り込まれたものなのか？ 地図やマスタースタンプランについてはど

うなのか？ もっと近づいて対象を見てみることは可能か？ なぜカリフォルニア・シティーを含めこれらの都市は成功/失敗したのか？

アート作品として、どういう意味をもつのか、我々はそのようにして我々を取り巻く環境と関わり、認識し、交流しているのか？ 多くのことが脳裏に浮かぶが、作品がどこまで我々を導いてくれるかはいささか疑問に思った。

空撮作品の間に配置されたのは、オフロード好きのアメリカ人が休日バイクで砂漠を駆け抜ける姿にカメラを向けた、一連の小さな作品だ。カリフォルニア・シティーは人口密度は低いが、実際には13,707人(2016年アメリカ合衆国勢調査局)が居住している。これらの人々は、近くの住民なのだろうか？ 当初の設計が失敗したこの町には、どうやら人間と交わりがあるようだ。これらは空撮写真が静的なのに対し、動的な作品である。展覧会の全体における作用はあまり明瞭ではないが、プロジェクトの今後の展開につながるヒントになりうるかもしれない。作家がこのプロジェクトに再び立ち返り、さらなる発展を見せて欲しいと期待したいものだ。(至)

4月7日~9日/ KANA KAWANISHI PHOTOGRAPHY

田中一太作品展くふうけいはこていさされてるのか？

スペインリアリズムを彷彿とさせる写実絵画を描く田中一太の個展。光と影の織りなす絶妙なイメージ、繊細なモチーフの造形で、対象の存在感が素朴に、かつ明確に表現されている。

しかしとりわけ興味深かった作品は、ピントがずれた対象がぼやけたような絵。構成上の巧みさと精巧な描写力を感じさせる他の作品と並んでいることで余計に目立った。それらは写真を一度インスタグラムに取り込み、作品サイズに合わせて印刷する。当然、解像度は十分ではないので、印刷された絵はぼやける。それをそのまま描いたもので、聞けば、そうした試みを行うのは自身の描く正統な写実絵画のイメージを批判的に検討したいからだという。絵である以上、写真のように対象を光学的に映す以上、それが求められる。そこには「見える」という認識に関わる深い問題

「#コメントモリな風景について」  
油彩、アクリル、pens



が潜む。田中は技術的研鑽の生むイメージを超え、より深く、遠く私たちの見ている世界のイメージを掴もうとしているのだろうか。(徳)

5月2日~5月8日/小田急新宿店

丁子紅子個展 沈黙する身体、あるいは真実

細長く虚ろな目、透けるような白い肌、血のように赤い唇。丁子紅子の美人画はどこか冷たい近寄り難さを漂わせつつも、誘惑的な雰囲気を持つている。それらは丁子が思う理想的な美人像の具現化である。気まぐれな心情の移り変わりや、はかなさのようなものが一筆一筆の丁寧な重なりあいで表現されている。口をつぐんでいる表情は、逆に言葉よりも多くのことを語っているよう感じる。近くでみると女性の身体の輪郭線の柔らかさが非常に心地よく目に映る。

今回の展覧会では丁子のモデルをつとめた中村月子のライブイベントも行われ、作品



外から撮影した展示風景

をジャケットにした新曲「むし」も披露された。作家の活動をより知るいい機会となった。(至)

5月5日~6月3日/清アーツスペース

川野美華 新作油彩画展 「Hardcore」

シュルレアリスティックな世界に生きる奇妙で愛らしい生き物たちを描く画家・川野美華の個展が銀座の4軒のギャラリーで開催された。メイン会場となる77ギャラリーでは新作の小品が集った。足を踏み入れたとたん、生き物たちに四方から見つめられる。一見気味の悪い出で立ちをしている彼らだが、淡く柔らかな色彩の美しさが際立っており、自然と惹きつけられる。生き物たちがおしゃべりをするために使用しているおもちゃのビーズやリボン、川野が幼少期より大切に集めていたものから使用することもあるとか。子供の頃から頭に住みついていて生物たちを具現化している川野の作品群は、きらきらとしたビーズやおもちゃを集めた瓶の中を

「最後の一日」



こっそりと覗くような、そんな幼少期の密やかで愛おしい感覚を思い起こさせる。(宮)

5月14日~5月24日/77ギャラリー

天野裕夫カエル展

木彫の作品をメインとした今回の展覧会。2012年に天野の故郷の岐阜・大湫にある1,300歳の大杉の再生のために、負担となっていた枯れ枝の伐採が行われた。その結果大量の枯れ枝が残され、天野はこれまで木彫をあまりしてこなかったが、これをきっかけに新たな素材へのチャレンジを始めた。早6年

が経ち、天然な枯木の中の美しい木目に魅せられた作家は、木彫とブロンズの铸造を緻密に組み合わせた作品を完成させたが、それらは従来の天野作品よりも木の暖かみが増えられ、生き物の生命力がより体現されている。老樹の枯れ枝は再利用され、これからも長く人々に愛でられ、作品の一部として存続していくのだろう。(至)



「麒麟」木、ブロンズ、具 W27×D25×H44cm 6,500円